

アユ資源の状況について

琵琶湖海区漁業調整委員会
令和6年(2024年)6月21日
滋賀県水産試験場

1. 魚探による資源調査

- 水深 30m 等深線付近の周回コースの魚探調査の結果、6 月の魚群換算値は 60 群（平年比 15%）となった（図 1）。平年に比べると 1 月から低位な状態が続いている。（図 2）。

※平年値は平成 26 年～令和 5 年の間の最大・最小および欠測値を除いた平均値を示す。

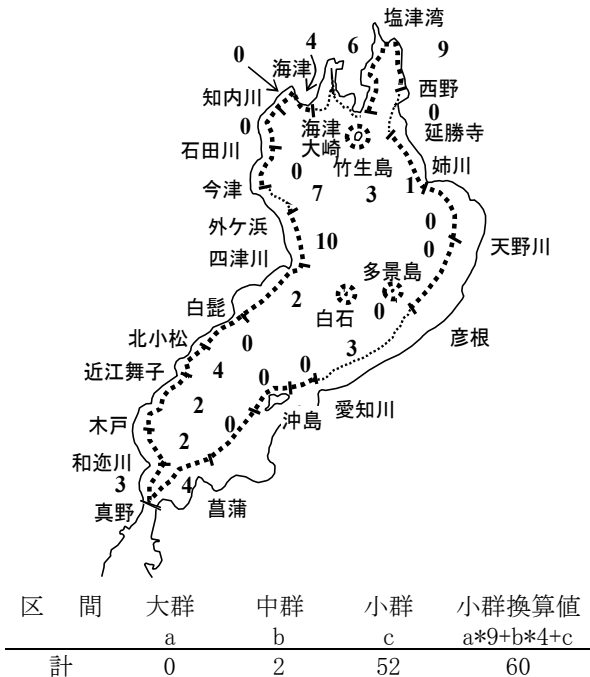


図 1. 令和 6 年 6 月魚探調査結果

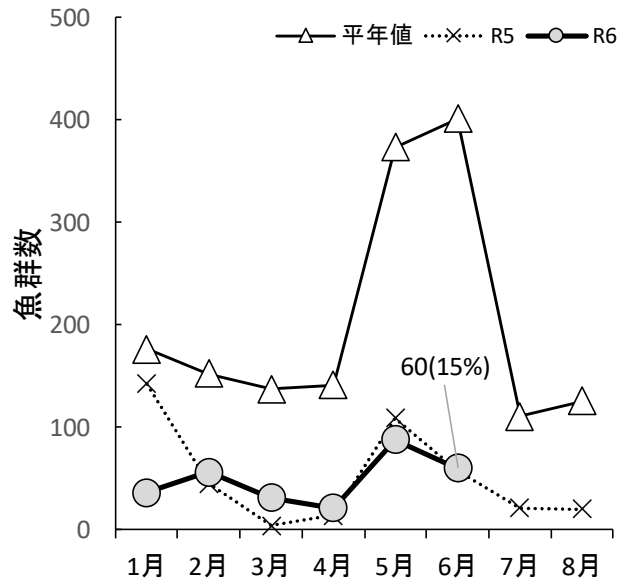


図 2. 令和 6 年の魚探調査結果の推移

- 北湖全域を東西に横断するトランセクト魚探調査の結果、6 月の推定資源尾数（暫定値）は 0.74 億尾（平年比 54%）となった（図 4）。周回魚探調査の結果同様、今年は資源尾数が低位な状態が続いている。

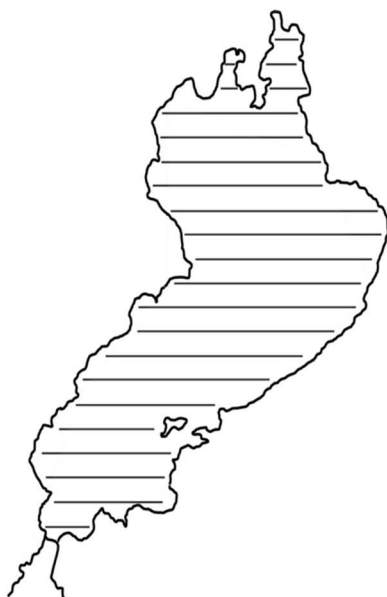


図 3. トランセクト魚探調査の調査線

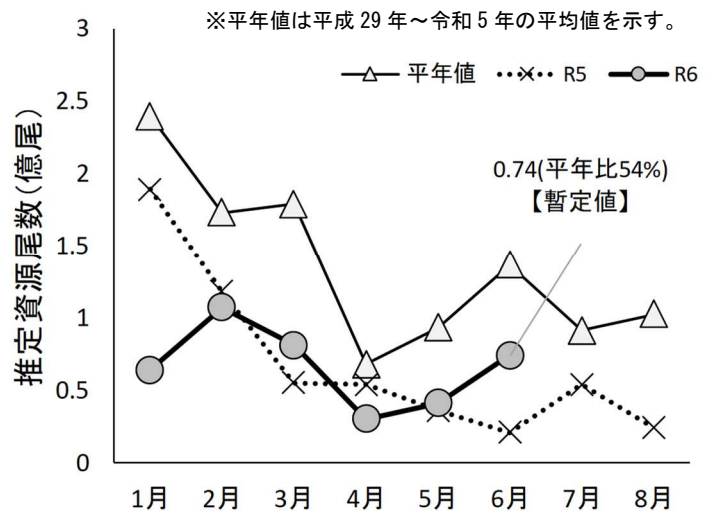


図 4. 令和 6 年の周回魚探結果の推移

2. 漁獲物体型調査

- 令和6年エリ漁獲魚の平均体長は漁期を通して平均値を上回っており、特に5月は平年値を約8mm上回る高い水準となっている（図5）。一方、栄養状態を表す肥満度は漁期を通して平年値を下回る水準で推移している（図6）。

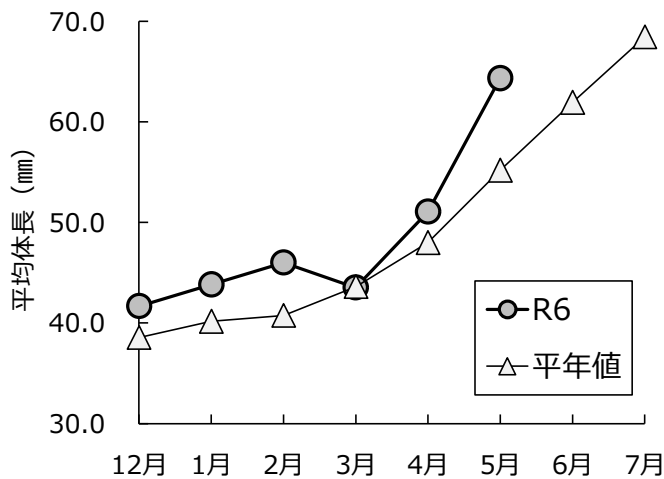


図5. 令和6年エリ漁獲魚の平均体長

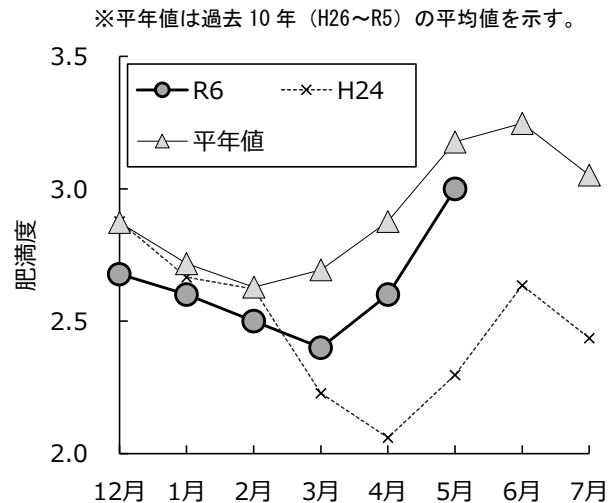


図6. 令和6年エリ漁獲魚の肥満度

3. 漁獲状況

【エリ】

- 12月上旬は北部で数kg～数十kg/日、南部で数十kg～数百kg/日と南北で漁獲量に差がみられた。12月中旬から漁獲量が減少し、1月から3月にかけて、漁獲が少ない状況が続いた。
- 5月以降には、日や場所による差が大きいものの、1日当たり数十kgの漁獲もみられるようになった。

【ヤナ】

- 3月から一部の河川で操業を開始した。一部の河川を除き3月末から比較的好調となった。

時期	エリ	ヤナ
12月上旬	全体の漁獲としては平年の6割程度だったが、南部では1漁協あたり数十kg～数百kg/日、北部では数kg～数十kg/日と地域差が大きかった。	
12月下旬	北部では漁獲が十kg/日を下回る漁協が多く、南部も数kg～数十kg/日と上旬にくらべて漁獲が減少した。	
1月	漁獲は南北ともに極めて低調で、1漁協あたり1kgにも満たない日が多かった。不漁のため休漁する漁業者もみられた。	
2月	漁獲は1月ほどではないものの極めて低調で、南北ともに1漁協あたり数百g～数kgの日が多かった。	
3月	漁獲は1漁協あたり数百g～数kg/日程度と低調な状況が続く。日によっては数十kg漁獲された漁協もあったが続きなかった。	一部の河川で操業開始。開始後の数日間は数kg～数十kgの漁獲があったが、それ以降は獲れなくなった。
4月	漁獲は3月に比べるとやや回復したもの、1漁協あたり数kg～数十kg程度の日が多く低調。	河川によっては数百kgほど獲れる日もみられた。
5月	一部では安定して数十kg/日の漁獲があるものの、1漁協あたり数kg～数十kg/日と不安定な場所が多かった。	一部の河川を除いて好調。多い日では数百kgの漁獲があった。